

# 木田余城出土の鏡は、小田氏の鏡か？



木田余城出土の中世の鏡

現在、上高津貝塚ふるさと歴史の広場では、テーマ展「中世から近世へ—小田氏が活躍した時代の考古学ー」を開催しています。今回は、ここで展示している市内木田余出土の中世の鏡を紹介します。この鏡は、昭和55(1980)年頃に発見されたもので、平成20(2008)年に当館に寄贈されました。発見場所は現在JR常磐線の電留基地になっているところの一部で、基地がつくられる以前は水田になっていました。発見した方の話によるとこの鏡は、耕作中に地下約60センチメートルの深さで砂に食い込んだ状態で見つかりました。水田では建物の部材らしき木材や、先が尖った木杭も鏡と同様に発見されました。

木田余城出土の中世の鏡

この鏡を発見した場所の地名は木田余字中城といい、この電留基地と周辺の水田を合わせた地には、戦国時代(16世紀)に木田余城が存在しました。現在は、耕地整理された水田と電留基地があるのみでその面影はありませんが、当時は内海だった霞ヶ浦に臨む湿地に囲まれ、攻めるに難く守るに易い城だったようです。当時の文献によると、当初は中世常陸南部を治めた小田氏の有力家臣信太氏の居城でしたが、その後、小田氏治と対立した信太氏は滅ぼされ、現在「信太範宗の墓」(市指定史跡)が常磐線西側の水田の中に残っています。

信太氏滅亡後、木田余城は小田城を失った小田氏治の居城となりましたが、常陸太田の佐竹義重らの攻撃を何度も受けた氏治は、人質を出して佐竹氏と和睦し、藤沢城(土浦市藤沢)に遷ります。天正18(1590)年の豊臣秀吉の小田原城攻めにともない作成された「関東八州城之覚書」(毛利文書)には、「きなまり 真田八郎」と小田氏家臣の城としての記載がありますが、小田氏がこの地を離れるときに廃城となつたようです。

さて、この鏡は、直径が11・5センチメートル、背面には十枝の枝を大きく広げた松の木が、その右端には、「天下一」の文字が陽刻されています。この「天下一」という言葉は、戦国時代後期に使われ始め、織田信長や豊臣秀吉もさまざまに優れた手工業者などに天下一を名乗ることを許したといわれています。鏡の製作者も好んで天下一の

この鏡を発見した場所の地名は木田余字中城といい、この電留基地と周辺の水田を合わせた地には、戦国時代(16世紀)に木田余城が存在しました。現在は、耕地整理された水田と電留基地があるのみでその面影はありませんが、当時は内海だった霞ヶ浦に臨む湿地に囲まれ、攻めるに難く守るに易い城だったようです。当時の文献によると、当初は中世常陸南部を治めた小田氏の有力家臣信太氏の居城でしたが、その後、小田氏治と対立した信太氏は滅ぼされ、現在「信太範宗の墓」(市指定史跡)が常磐線西側の水田の中に残っています。

信太氏滅亡後、木田余城は小田城を失った小田氏治の居城となりましたが、常陸太田の佐竹義重らの攻撃を何度も受けた氏治は、人質を出して佐竹氏と和睦し、藤沢城(土浦市藤沢)に遷ります。天正18(1590)年の豊臣秀吉の小田原城攻めにともない作成された「関東八州城之覚書」(毛利文書)には、「きなまり 真田八郎」と小田氏家臣の城としての記載がありますが、小田氏がこの地を離れるときに廃城となつたようです。

さて、この鏡は、直径が11・5センチメートル、背面には十枝の枝を大きく広げた松の木が、その右端には、「天下一」の文字が陽刻されています。この「天下一」という言葉は、戦国時代後期に使

銘を入れ、天下一銘の鏡が乱発したことにより、天和2(1682)年には、江戸幕府が使用禁止にしました。なお、江戸時代以後、和鏡の形式は長い柄のついた柄鏡が主流になります。この鏡は円鏡で、図柄も鏡面一杯に文様を配する点などから、江戸期以前の作と考えられ、16世紀後葉の可能性が高いとされています。

今回発見された鏡は銘文、形式などを踏まえると、小田氏治が木田余城主のころにつくられたものと思われます。小田氏が使用していたことの立証は難しいですが、戦国時代の木田余城をしのばせる逸品であることは確かででしょう。

今回ご紹介した鏡は、令和3年度に保存処理を行い、緑鏽が取れて、きれいな状態になりました。テーマ展終了後も考古資料館に7月3日(日)まで展示します。また、木田余城跡の文化財説明看板も新しくなりました。ぜひご覧ください。

■上高津貝塚ふるさと歴史の広場  
(☎ 826-7111)